



あるじでえ

No.22

世田谷区教育委員会 民家園係

〒157-0067 世田谷区喜多見5-27-14

◎ 次大夫堀公園民家園

☎ 03(3417)8492

◎ 岡本公園民家園

☎ 03(3709)6959

平成5年2月1日 発行

平成13年5月 増刷

平成28年7月 増刷

庚申さまの話

〈はじめに〉

世田谷区立次大夫堀公園民家園（喜多見5丁目）の南門を入ったすぐのところに、2体の庚申さまがあります。この庚申さまが祀られていた元の場所は等々力6丁目24番地で、昭和63年に民家園内に移されました。

今回は庚申さまについて、その歴史や祭りなどの一般的な話をします。世田谷区内で祀られている庚申さまの具体的な事例に関しては、次回で紹介することにしましょう。

〈庚申信仰の歴史〉

わが国の庚申信仰は、時代によっていくぶん違っています。以下、わが国の庚申信仰の歴史について簡単に見てみましょう。

そもそも庚申信仰は、中国の道教に基づく信仰です。道教の教えによれば、人間の体内には三尸と呼ばれる三匹の虫がいて、いつも人間を監視しています。60日

ごとにめぐってくる干支で庚申（音読みでコウシン、訓読みでカノエサル）の夜、人間の睡眠中に三尸は体内から抜け出して天に登ります。そして人間の常日頃の悪事の数々を、天帝に報告するというのです。その結果、天帝は人間の寿命を縮めて早死にさせてしまうのです。三尸が天に登らないようにするためには、人々は庚申の日に徹夜をして寝むらないようにしなければなりませんでした。



写真1 民家園内の庚申塔

※1 道教

道教というのは古代中国の民間に伝えられていた信仰を基にしているが、仏教や儒教（孔子によって説かれた教え）などの影響も強く受けている。老子という人物を教祖とする説もあるけれども、実際には教祖の不明な宗教であるらしい。その教えの中心はこの世での幸福を願う現世利益的

なものであり、特に不老不死の永遠の生命を手に入れること（神仙思想）が目的となっている。わが国には道子（仏教でいう僧侶）が来ることもなく、道教教団も組織されることはなかった。しかし道教の教えはわが国の修験道などに取り入れられ、庚申信仰を始めとして多くの習俗にその影響を見ることができる。

わが国に庚申信仰が伝えられたのは平安時代の初め頃で、まず宮廷貴族の間に取り入れられました。その当時、宮中で庚申の日に徹夜することは「守庚申」あるいは「御庚申」と呼ばれ、眠気を醒ますために管弦の演奏や歌会などを催したり、酒を飲んだりして、にぎやかに庚申の夜を過ごしました。静かに慎んでいなければならないとする道教の教えとはかなり違ってきます。

室町時代中頃になると、庚申信仰は仏教に取り入れられ、仏教式の庚申信仰が行われるようになりました。「守庚申」は「庚申待ち」と呼ばれ、釈迦如来などを本尊として拝むようになったのです。

室町時代から一般の人々の間にも普及し始めた庚申信仰は、江戸時代になると全国各地に広まるようになりました。またこの頃には、仏教式の庚申信仰に加えて、修験道に取り入れられた庚申信仰も普及するようになっていました。

このような状況のなか、神道家の山崎闇斎(1618~82)は神道式の庚申信仰を提唱し、猿田彦を本尊とするように主張しました。ですから、江戸時代には仏教式・修験道式・神道式による3種類の庚申信仰が行われていたこととなります。

※2 修験道

修験道は日本古来の山岳信仰に仏教・道教などの影響が加わって作り上げられた宗教である。山中で修行をすることにより、並々ならぬ不思議な力を身に付けることができると信じられていた修験者(山伏)達は、人々の求めに応じて加持祈禱や占いなどに活躍するようになった。修験者達が修行を行った山としては、九州の英彦山を始めとして、金峰山・大峯山・熊野山・羽黒山などが有名である。

この結果、それぞれのやり方は違っていましたけれども、天皇をはじめとする貴族たちから諸大名、および農民・漁民・町人たちの間に庚申信仰は信じられるようになったのです。

明治時代になると排仏棄釈の影響を受けて、庚申信仰は神道式と仏教式が混ざ合わされた神仏習合の形で行われることが多くなりました。

現在では一部の地域を除き、庚申信仰も他の信仰伝承と同様に、次第に失われつつあるようです。

〈庚申信仰の崇拜対象〉

庚申信仰で崇拜対象として祀られているのは、仏教式では青面金剛が多く、観音菩薩や阿弥陀如来の場合もあります。神道式では猿田彦を本尊としていることは先に述べたとおりですが、これは庚申の「申」と「猿」が同音であることから考えだされたようです。

青面金剛というのは、本来は人の精気を奪い、血肉をむさぼり、悪病を流行させる悪神とされていましたが、後に善神となりました。帝釈天のお使いで、北方を守護するとも言われています。

その形相といえば、4本あるいは6本

※3 排仏棄釈

仏教がわが国に伝えられて以来、神道と結びつく神仏習合の現象が見られるようになった。神社の宮司を僧侶が兼務したり、神社に付属する寺としての神宮寺が建立されたりした。はなはだしい場合には、神前で僧侶による読経すらも行われるほどのありさまだった。こうしたなか、仏教を排斥しようとする運動が起こったのである。この仏教排斥運動には、寺院を破壊し、仏像や仏具などを捨て去るといった行動が伴っていた。全国的な排仏棄釈運動が展開されるのは明治時代に入ってからであるが、江戸時代にも水戸藩主徳川光圀などによって仏教の排斥が行われている。

の手を持ち、それぞれの手には三股叉みつまたさすや棒などを持っています。全身は青色で、3つある目は赤く、牙をむきだした憤怒想をしています。一般の人々の間では青面金剛と呼ばれることは少なく、「庚申さん」として親しまれています。

一方猿田彦は、記紀神話に登場する神で、天から降りてくるニニギノミコトを道案内みちあんないしたことで広く知られています。顔は赤く、目は大きく見開いてギョロッとしており、鼻は長く突き出ています。道案内の神であることから道祖神どうそじんとも考えられてきました。



写真2 青面金剛

その結果、青面金剛の庚申像が道祖神として信仰されたり、道祖神の1つである地藏が庚申と考えられるなど、猿田彦を媒介として、庚申信仰と道祖神信仰が入り混じるようになったのです。

〈庚申講について〉

60日ごとにめぐってくる庚申の日に、人々は徹夜をして夜を明かしました（といっても、徹夜をするという原則は次第に崩れ、夜の12時過ぎには帰宅したり、食事

※4 道祖神

村境や道の辻などに祀られ、悪霊などの災いが村の中へ入り込まないようにしてくれると信じられている神。サイノカミ・サエノカミ・ドウロクジン・フナドノカミなどとも呼ばれている。

が終わると解散したりするところが多くなりました。このことを特に「庚申待ち」と呼んでいます。その際、1人で徹夜をすることはほとんどなく、人々が寄り集まって夜を明かしました。この人々の集まりのことを庚申講と呼んでいます。



写真3 猿田彦

一般の人々の間に庚申講が組織されるようになったのは江戸時代初期頃からで、僧侶や修験者がまとめ役となりました。庚申講は親類縁者で構成されるもの、隣近所の人々で構成されるもの、その2つが混ぜ合わされているもの

の3つに分類することができます。また、庚申講は宗教に関わりなく構成されることが多く、同じ庚申講のメンバーに禅宗の人もいれば、天台宗の人もいるといった風で、中には神道と仏教の人が一緒に庚申待ちをする地域もめずらしくはありません。

庚申待ちが行われるのは庚申講のメンバーの家であったり、村の庚申堂こうしんどうが会場として使われたりします。庚申の日仕事を終えた後、入浴を済ませて身を清めた講のメンバー達は、それぞれの家や庚申堂に集まります。そこではまず、庚申さま（青面金剛や猿田彦など）の掛軸を掛け、その前に供物を供え、みなで般若心経はんにゃしんぎょうなどのお経を唱えるのです。その後は酒を飲んだり、手料理を食べたりしながら談笑して過ごしま

す。村の取り決めごとについて話し合いをすることもあれば、農作物の話、村の縁談、嫁姑の悪口など、とにかくその内容は決まっておらず、色々な話題が持ち出されました。こうして様々な事を話題にしなければ、長い夜を過ごすことができなかつたのでしょう。話をする事は、眠気をさますための方法だったようです。

先にも説明したように、庚申信仰では徹夜をして日の出を待つのが原則でした。庚申待ちの夜に夫婦が同衾をしてはならないと言われていたのも、実は眠ってはいけないことの戒めだったのです。庚申の日に身籠もった場合（後には生まれた場合も含めて）、その子どもは将来盗人になると考えられていました。江戸時代の大泥棒石川五右衛門は庚申の日に宿ったのだとうわさされたのも、基づくところは庚申信仰だったのです。また、庚申の日に子どもが生まれた場合には、金に関係する名前を付けるようにもなりました。最初から金を与えてあげれば、盗みをしなくなるというのです。文豪夏目漱石の幼名が金之助なのも、漱石自身が庚申の日に生まれたからだと言われています。

この他、庚申の日にはよなべ仕事をしてはならない、洗濯をしてはならない、髪を洗ってはならないとも言われていました。

〈庚申さまのご利益〉

庚申さまはどんな神として信仰されているのかといえば、まず病気を治してくれる神と考えられているようです。頭痛を治してくれたり、ほうそう（天然痘）を治してくれたりなど、庚申さまに色々な病気を治してくれるよう祈願することは全国的に見られます。また農村では豊作の神・養蚕の神、漁村では大漁や海上安全を祈る神、町部では商売繁盛の神として信仰されてきました。こうしたご利益は人々の生活の大半

に関わっており、庚申さまがわが国でいかに広く信仰されてきたのかがわかります。

以下は、窪徳忠著『庚申信仰』（山川出版社）に記載されている、庚申さまのご利益に関する資料です。こんなに多いのかと驚くばかりです。

作の神・漁業の神・商売繁盛の神・道案内の神・開拓の神・出世神・治病の神・病気よけの神・ほうそうの神・風邪の神・厄病よけの神・頭痛の神・安産の神・健康の神・寿命の神・長生きの神・人助けの神・災よけの神・火難水難よけの神・盗難よけの神・悪魔退治の神・町内の守り神・家内繁盛の神・子どもの守り神・火の神・運気の神・消費を嫌う神・欲ばりの神・死を司る神・命取りの神など

〈庚申塔について〉

神社や寺院の境内、あるいは村外れの道ばたや辻などに、「庚申塔」とか「庚申」、あるいは「猿田彦大神」と刻まれた石碑や青面金剛像を彫った石碑を見かけることがあります。先に紹介した次大夫堀公園民家園にある庚申さまも、青面金剛像を彫った石碑です。

こうした石碑は庚申塔と呼ばれるもので、庚申さんの供養のためや庚申講の記念のために立てられたものです。どのような時に庚申塔を立てるのかといえば、61年目ごととする地域や、10年目ごととする地域がある一方、三十三座（33回目の庚申講）の日に立てるといった地域もあります。また、庚申の年に立てられた庚申塔が最も多いのですが、他の干支の年に立てられた庚申塔がないわけではありません。この他特に年月にはこだわらずに、講のメンバーの都合で立てたりすることもあるようです。

文化財資料調査員 高見寛孝

*写真2と写真3は窪徳忠著『庚申信仰』（山川出版）から転載しました。